

伝二条為冬筆「源氏物語梗概書」(個人蔵)の紹介

—翻刻・解説—

岩 坪 健

一、書誌

中世になると連歌が盛んになり地方にまで広まり、源氏物語を踏まえて詠まれることもあり、その物語の内容を知る必要が生じた。しかしながら源氏物語の写本を所持するのは朝廷や幕府と、そこに仕える上流階級の人々のみであったため、連歌愛好家の要望に応えるため梗概書が数多く作成された。そのうち最も流布したのは、連歌に使用される寄合の言葉も盛り込んだ『源氏小鏡』である。本稿で紹介する源氏物語の梗概書は二条為冬筆とされ、寄合語が散見されるので『源氏小鏡』のように思われるが似て非なるものであり、管見の限り同書を見出せず、ここに紹介する次第である。

まず書誌から述べる。本書を納めた桐箱の蓋表には、中央に「二条為冬卿夕霧卷」と墨書されている。左下には何か書かれていたのか、墨で塗り消されている。本写本は一帖、表紙は緑色の布表紙に金糸にて唐草模様が縫い取りされている。表紙の大きさは縦十八・二、横十六・五センチ、表紙の左上に本文とは異なる筆で、「二条為冬卿夕霧卷」と墨書された金紙(縦十・六、横一・八センチ)が貼られている。見返しは前後とも金箔を散らし、遊紙も前後に一丁ずつあり、いずれも本文の料紙とは異なり、改装された後に付けられたと推測される。本文の冒頭には、「二

条為冬卿 夕霧の」と記された無地の小紙片（縦六・三センチ、横六ミリ）が貼られている（35頁の図、参照）。内容は夕霧の巻頭から権本の巻頭までの零本で、綴葉装で八枚一括りのみ現存し、十六丁に書かれている。ところどころ小字の書き入れがあり、本文と同筆と見られる。

伝承筆者の二条為冬は二条派歌壇の祖である二条為世の子で、『続後拾遺和歌集』以後の勅撰集に二十首入首した。生年不明で、建武二年（一三三五）に尊良親王を奉じて足利尊氏追討軍に加わり、箱根竹の下の合戦に敗れ自刃した。真筆の短冊が慶応義塾大学に所蔵され、「Keio Object Hub」の解説には、

書流系譜によると、父為世は定家流に、祖父為氏（一二二二―一八六）、その弟為相（一二六三―一三二八）、為冬の兄為藤（一二七五―一三二四）らは鎌倉時代に台頭した法性寺流に、能書として名を連ねている。が、この為冬は伝統的な上代様（平安時代の優れた書跡の総称。十七世紀半ば、御家流・唐流の隆盛に対し、平安朝の名筆への回帰を唱えた復古和様の動きがあり、上代様の書風が復興された）の書法を身につけており、書き慣れたうまさみせる。

とある。為冬筆と伝来する古筆切は数種類あり、小野切（金葉和歌集）は確かに上代様風であるのに対して、本書の書風は上代様とは認めがたい。また本文中に「六花」の名が見え、それが貞治三年（一三六四）以後に編纂された『六華和歌集』ならば本書の成立はそれより後、すなわち二条為冬の没後になる（第四節、参照）。書写時期も十四世紀までは遡りにくく、室町末期の写しと見ておく。

二、『源氏小鏡』との関係

『源氏小鏡』は編者未詳で、原形は南北朝時代に作成されたかと推定されている。本書と『源氏小鏡』との共通点は寄合語を有することであるが、両者を比較すると内容は異なる。たとえば本書の紅梅の巻の末尾に、

梅のつけ合に、「ふと(檜紙)ころかみにうつるにほひ」などあらは、「こうはひ(紅梅)」の心あるへし。

という説明があるが、この付合は『源氏小鏡』には見られない。そのほか竹河の巻には、

「桜をかけ物」といふことあらは、「玉かつら」「ひけくろ」などもよし、「やよひのすゑ」「はなあらそひ」よし、とあるが、『源氏小鏡』には「桜のかけもの」と「花のあらそひ」以外の寄合語は当巻には見られない。もう一例だけ挙げると、椎本の巻の巻頭にある、「そ(総じて)う(祝い)していわ(推)ひに(付合)しいのつけあひ有へからす」という一文も『源氏小鏡』には見当たらない。

また、紫の上の享年も一致しない。本書の幻の巻頭には、「むらさき、みのりの巻の八月十四日かくれ給ふ、御年は四十はかりと見えたり」とあり、約四十歳で亡くなったとする。それに対して『源氏小鏡』は若紫の巻に四十五歳と記す。(注)総体に本書と『源氏小鏡』との関係は薄いと言えよう。

三、『源氏大鏡』との関係

『源氏大鏡』は編者不明で室町時代中期に成立したと推定され、源氏物語の和歌を全首掲載した梗概書であり、寄合語は収めていない。本書は和歌を一部しか載せていないので『源氏大鏡』ではないが、『源氏小鏡』よりも共通点が見られ以下に列挙する。

○紅梅・竹河の巻の順。この二巻は中世において順序が定まっておらず、本書と『源氏大鏡』は紅梅の巻が先、『源氏小鏡』の殆どは竹河の巻が前である。

○本書の幻の巻の末尾には源氏物語にない、雲隠の巻に関する記述が見られる。

廿六雲かくれの巻(宝蔵)ほうさう(宝蔵)にこめられたる故也、廿五より廿七へうつるへし、此あはひ八九の年と見えたり、巻も二帖有けり、

『源氏小鏡』には同様の記載はなく、『源氏大鏡』幻の巻末に似た描写が見出せる。

廿六、雲かくれといふ、あまりにあはれにて、人の心をまどはしけるにや、近代は宇治の宝蔵にこめられて世にわたらず、廿五、まほろしより、廿七へうつるへし、そのあひた八九年とみえて、(注)

○和歌は定型詩であるので文章よりも加筆しにくく本文の異同は少ないが、御法の巻の次の一首はかなり異なる。まず本書の本文を引用して『源氏物語大成 校異篇』（以下『大成』と呼ぶ）の底本（一三八四頁1行目）と異なる箇所傍線を引き、異文を傍記する。

おしからぬ御法にの身なからも今はとて薪つきなんねにのかなしきよに

『大成』所収の諸本の本文を見ると、陽明文庫本が「今は」である以外は底本と一致する。『源氏大鏡』では結句が「程のかなしき」である以外は本書と同文である。なお当該和歌は『源氏小鏡』では第六系統「和歌中心本系」の京都大学本にのみ見られるが、本文は本書とは異なり、第二句が「我身なからも」である以外は『大成』の底本と同じである。

○本書の次の一節は物語本文とほぼ同じである。本書の本文に『大成』の底本（一三四六頁2行目）を傍記する。

しかはこ、かしこににた、すみて、山田のひたにもおとるかす、いろこきいねとましりてうちなくも、うれへか（む）
ほるなり、（夕霧の巻）

大きな異同は「こ、かしこ」の箇所で、『大成』所収の諸本はすべて「た、まかきのもと」である。一方、次に引く『源氏大鏡』は本書と同文と見なせる。

鹿はこ、かしこにた、すみて、山田のひたにもおとるかす、色こきいねにましりてうちなくもうれへかほなり、ちなみに『源氏小鏡』には、右記の古文に該当する本文はない。

○本書には物語本文にも『源氏小鏡』にもない、「首に掛けて」という本文がある。

宇治に「とはすかたりの古人」といふ事あり、おい人ともいへり、ふるふみかひくさきしみと云は、むしのす(首)みなりてくひにかけてもつ、みな此古物かたりの付合也、(橋姫の巻)

傍線を付けた箇所は文意不明で、「すみ」は「すみかに」から「かに」が脱落したと見て「虫の住みかになりて首に掛けて持つ」とも、あるいは「すみ」を「しみ」(紙魚)の誤写として「虫のしみなり、手首に掛けて持つ」とも解釈できる。『源氏大鏡』には、

うぢのふる文とは、年久もちて廿年はかりくびにかけて薫に奉りし事也、かびくさく、又しみといふむしのすみかになりたれとも、あとはかはらず、

とあり、本書の本文も「すみかに」の「かに」が抜けたと考えられる。(注6)

四、注釈

本書は梗概のみならず注釈を加えている箇所も散見される。以下、いくつかを列挙する。

○橋姫の巻で「姫君二人」の箇所、「あけまきのおほい君、昔にかよふ中の君」が割注で書きこまれている。古系図を見ると、九条家本には「総角大君」(あけまきのふるさとはなる)、「故郷離中君」と記され、さらに後者の説明文には「むかしにかよふ中君とも申す」とある。為氏本も「総角大君」「通昔中君」とあり、後者の解説には「ふるさとはなる、中君とも申す」と書かれ、本書の割注と一致する。

○幻の巻に「六花」という言葉が見られる。

同 つれく〜と我なきくらす夏の日をかことかましきむしの声かな

是はひくらしをよまれたる歌也、六花にも入候、

「六花」は私撰集『六華和歌集』ではなく、それを解釈した注釈書『六花集注』かと推測されるが、現存する伝本

には前掲の和歌（光源氏の詠歌「つれづれと」は見出せない。ちなみに『六華和歌集』は貞治三年（一三六四）以後、『六花集注』は応安七年（一二三四）から宝徳四年（一四五二）までの間に成立した。

○夕霧の巻に「引歌」「本歌」に関する解説がある。

又夕霧のこと葉に、いかによからむとおほせられし心は引歌に、「いかにしていかによからむ小野山の上より
おつる音なしの瀧」と云歌の心なり、本歌にあるうへは、うたかふへからず

伊井春樹氏編『源氏物語引歌索引』（笠間書院、一九七七年九月）によると、「いかにして」の和歌は出典不明で、（注8）
当巻に二か所引かれている。『新編日本古典文学全集』の本文で示すと、一つ目は夕霧の心理描写の中の「なほよからむ」（④四三三頁）の箇所、二つ目は夕霧が恋文に和歌を記したあと「上より落つる」（④四五四頁）と書いた箇所にそれぞれ引歌として注されている。本書の一節「いかによからむ」と合うのは一例めの「なほよからむ」であるが、本文は「いかに」と「なほ」で一致しない。『大成』（一三三五頁12行目）によると青表紙本系統は「なをよからむ」で異同はないが、河内本系統は「よからむ」の箇所が「なかゝるへき」（長かるべき）で引歌から離れてしまう。結局、本書の「いかによからむ」と同じ本文は見当らない。

五、終わりに

本書は竹河の巻に、「かちかたのいもうと君、山吹の衣也」とある。しかし物語本文では負けた大君が「桜の細長、山吹など」、中の君は「薄紅梅にさくら色」であり、「山吹」に関しては『大成』（一四七四頁10行目）に大きな異同は見られない。本書の記述は誤解によるかもしれないが、そのように理解されたことは享受史の上では見過ごせず、源氏物語の需要の一環として貴重な書と言えよう。

(注)

1 岩坪健『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、二〇〇五年二月)に翻刻した計十三本のいずれにも見当たらない。以下の考察においても、小著に収めた『源氏小鏡』に限定する。

2 「桜のかけもの」は『源氏小鏡』諸本の多くに見られるが、「花のあらしひ」は第三系統「増補本系」の三井寺聖護院系統にのみある。

3 多くの『源氏小鏡』は四十五歳であるが、四十六歳(三井寺聖護院系統)や三十九歳(第五系統「梗概中心本系」の連藏筆)とする伝本もある。

4 注1の小著に収めた十三本のうち、連藏筆本は登場人物ごとに記すので除くと、一本(第五系統「梗概中心本系」の飛鳥井重雅筆)だけが紅梅、他の十一本は竹河が先行する。

5 『源氏大鏡』は第一類から第四類に分類され、本稿では第二類に属する慶長頃の古写本「源氏物語抜書抄」の翻刻(稲賀敬二氏、古典文庫、一九八〇年五月)を引用する。第一類の本文と大きく異なる場合のみ、第一類の『源氏大鏡』(石田穰二氏・茅場康雄氏編、古典文庫、一九八九年二月)を引用する。

6 ちなみに源氏物語の索引に「手首」という言葉はないが、「首に掛けて」の用例は宿木の巻に見られる。

昔、別れを悲しびて、骨をつつみてあまたの年頸くびにかけてはべりける人も、仏の御方便ほうべんにてなん、かの骨の囊かほねふくろを棄すてて、つひに聖の道ひじりにも入りはべりにける。(『新編日本古典文学全集』⑤四五六頁)

7 両系図は池田亀鑑氏編『源氏物語大成 研究・資料篇』(中央公論社、一九五六年一月)所収。

8 松下大三郎氏編『続国歌大観』(明治四四年九月)には、『古今和歌六帖』の末尾に「古今和歌六帖拾遺」と題して列挙した和歌群の中に、

同夕霧

如何にして如何によるらむ春の山のうへより落つる音なしのたき

とある。「同」は『河海抄』を指すが、玉上琢彌氏編・石田穰二氏『河海抄』（角川書店、一九六八年六月）には当該和歌は見当たらない。

ちなみに伊井春樹氏編『源氏物語引歌索引』所収の古注釈において、当歌は『弄花抄』に「猶よからん事を小野山歌」とあるのが初出で、歌一首は『休聞抄』をはじめ『紹巴抄』『岷江入楚』『湖月抄』等に引かれている。

凡例

一、翻刻は原文のままを原則とし、誤字・脱字・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解の便宜を考慮して次の操作を行なった。

- 1、底本の旧漢字・異字体・略体は、通常の字体に改める。
- 2、読点を付け、寄合語などは「」で括る。
- 3、虫損などで読めない箇所は□で示す。誤写と思われる箇所には、右側の行間に（ママ）と記す。また推定した文字を（カ）の中に入れ、振り漢字も（ ）内に記す。
- 4、小字の書き入れがあるが、活字の大きさは変えずに「」で括る。

一、夕霧の大将と申事、此卷よりなり、おち葉の御は、一条のみやす所に(具して)、ひゑさかもとのをのといふところへおはしたり、此小野はひろき里にて、ひへをめぐりてある也、此ことによりておちはのをの、夕霧の小野、又(栗栖)くるすの小野、皆おなし所也、ことによりて名をかへたり、いろん(異論)ありといふとも、ほんにくわしくあるうへは(つりのち)給ふへし、又てならひの小野といふも同里なれとも、いますこし山ふかく入て、よかは(横山)、くろたになとひえの山にかたかかけたりとて、ならひの巻に見えたり、おち葉の宮のさたあるときは、おちはの小野也、まめ人の大将、おち葉を心にかけておはしたる時、松かきの(松が崎之)おやまのゆわかへも都にまかりて秋の色つきたり、九月也、八月にもおはしたり、二たひの小野、けしき也、霧の爰もとまてたちくれは大将、

山里のあはれをそふる夕霧にたちいてん空もなき心ちして

と、よみ給ひし故、巻をも夕霧、又まめ人をもあらためて名つくるなり、これは八月の小野、歌也、九月十日はいと、秋はつるけしき心すこく、嶺の葛葉も心あはた、しうふきちらす山おろしに、まかきの虫もなきみたれ、たきのをと物思ふ人をおとろかしかほにと、ろきおちたり「この物おもふ人であるは、あひしやうの心も有、みやす所小野にてかくれ給ひしかは、おちは、ふちころもあるへく候、又夕霧の落ち葉をこい給ふ物おもひもあり、心得て付合あるへく候」しかはこ、かしこにた、すみて、山田のひたにもおとろかす、いろこきいねとましりてうちなくも、うれへかほるなり、夕霧の大将、

里とをみ小野、しのはら分てきて我もしかこそ声もおしまね

此歌は恋なり、御返事、少将の君といふ女房、

藤ころも露けき秋の山人は鹿のなく音にねをそそへつる

あひしやうと恋と引合て、なく音にねをそへてよめり、又、音なしのときは此小野に有、落葉の宮をのにて、てならひ、

あさ夕になく音をたつる小野山はたえぬ(マ)や音なしの瀧

とありしなり、又夕霧のこと葉に、いかによからむとおほせられし心は引歌に、「いかにしていかによからむ小野山の上よりおつる音なしの瀧」と云歌の心なり、本歌にあるうへは、うたかふへからす

廿四 御のり

一、此巻、御のりと名つくる事は、むらさきの上なやみ給ひて、後の世のためにいかめしきく(功德)とくの事せられし中に、日毎にほけ経をかき給ふ事、千部ありて此巻にく(供養)やうあり、僧のふせ(布施)にひき給ふむらさきのあやのけさは、ぬひめにて心ことなり、ほとけのかさりはまして仏のおはしますらん所もちかき心ちする、とほん(本)にある(はカ)く(極楽)らくなり、女の御をきてには、いたりふかく、にはか也、御いとなみとも見えす、いその神の世、をへたる御くわんにやと、ちやう(聴聞)もんの人々も皆、泪をとし給ひけり、

「薪(マ)こるとは、その日のたう(尊師)しの御法のめてたきよしをと(分)れたるてい也、大方つとむる声といふ」

薪(マ)するさんたんの声いかめしうとあり、さんたん(讃嘆)は何もほめほむる、紫の上、物心ほそく、か様の折節はまいりつとひ給ふ人々のかほ、見わたし給ふも、これやかきりならむとあはれなり、ちやう(聴聞)もんのために御う(後美)はなりたちつとひ給へり、したの心うちとけねと、うはへには情をかはし給ひし御かたく誰もとまるましき世なれ共まつ我独りさきた、ん事をあはれにおほして、あかしの御かたへむらさき、

おしからぬ御法なからも今はとて薪(マ)つきなんねのかなしさよ

「薪(マ)つくる又ひめ(マ)へするとは、とりへ野、てい也、何もせんたん(所)たき木(所)つきしことなり」

廿五、まほろし

一、むらさき、みのりの巻の八月十四日かくれ給ふ、御年は四十はかりと見えたり、年かへりぬ、春のひかりを見給ふにも、源氏の御心一つはくれま(本)ひたるやうにおほさるれば、みすのともおさく(はカ)いてたまはず、本よりの

御ほいなれば本意也、世をもいとほんとおほしめせとも、むらさきのなけきによりて、と人のいひつたへん事もあまり心よはく名も口惜敷おほせは、一めぐりまでとねんし給ふそかなしかりける、とりわきき春をはむらさきのしめ給ひしかは、うへをき給へる梅桜につけても御袖のいとまなし、

源氏、

我やとは花もてはやす人もなしなに、か春のたつねきつらん

植てみし花のあるしもなき宿にしらすかほにもきぬるうくひす

同 今はとてあらしやはてんなき人の心と、めし春のかきねを

同 は衣のうすきにかはるけふよりはうつせみの世そいと、かなしき

同 つれくくと我なきくらす夏の日をかことかましきむしの声かな

是はひくらしをよまれたる歌也、六花にも入候、秋のはしめ雁の鳴てわたるをも、つらをはなれぬはうらやましくて、

同 大空にかよふまほろし夢にたに見えこぬたまの行ゑたつねよ

此歌故、巻を名付たり、又ほうしかやうきひのほうらい^(蓬萊)またつねし心もあり、かくて御はての事すきて、十二月

つこもり、あすのつゐたちの大しん^(大臣)たちのおはしますつぎ御ひきいて物まで、ようい^(用意)しをきたまひて、

物思ふとすくる月日もしらぬまにとしも我身もけふやつきぬる

とよみ給ひしは出家し給ふへきよしとは見えたれとも、いか、なりにけん、しる人、世になし、廿六雲かくれの巻

ほうさう^(宝蔵)にこめられたる故也、廿五より廿七へうつるへし、此あはひ八九の年と見えたり、巻も二帖有けり、「ひ

とりかくれ給ふとは、けんしの御事也」

廿七、かほる中将「此巻、匂ふ兵部卿の宮とも」

一、かほる中将とは女三のうみ給ひし若君、この巻に十四にてけん^(元服)ふくして、うこんの中将と也、御身のありか、

むまれつきてかうはしく、すこしたちより給ふところも、のこりのうつり香しみふかく、うちふるまひ給ふをかせ(追い風カ)も、ひやくふのほかまてかまりけり、百歩も、あゆみのほかまてもあるへし、にほふ兵部卿の宮とは、かほるのにほひをうらやましくそねましくおほしめして、きん上の御子三の宮とせしは、からの焼物を梅の花の香のやうにあはせて、御身にもしめ、御そにもうつし給ひしかは、よるなどは取まかゆる程に給へり、さる程に世の人のこと草に、にほふ宮、かほる大将といひつ、けしゆへ、このまきには名を二つあらはしたり、「此巻なんとは昔寛源氏といへり」

ならひ、こうはひ

一、此こうはひと名つくる事、あせちの大納言と申人は、姫をあたまち給ひし、ひんかしのたひ(対)の梅ゆへ也、その姫君をもひんかしのたひのをは、こうはひの御方と申けり、大納言をも、こうはいの右大臣とけい(承因)つにあり、

一、此の大納言、にほふ宮をむ(磨)こにせまほしくおほして、さかりなるとき此こうはい一えたおらせて御(至)このわらはにて、せうてん(昇殿)し給ふ、そのふところかみに花をはつ、みそへたてまつりたまふ、大納言、

心ありて風のにほはずその、梅にまつうくひすのとはすやあるへき

匂ふみや見給ひて御心よせの花なれば、いと心ことにもてはやし給ふ、こうはいはその色にとられて、かはしろき梅にはをとる物なるを、此花は色も香もとりならへておもしろし、とほめ給ひしなり、今程けんしのつけあひ(付けあひ)に「ふところかみの文」なんとあるは此事也、文にてはなし、はなをつ、みそへられたれば梅のつけ合に、「ふところかみにうつるにほひ」などあらは、こうはひの心あるへし、

ならひ、たけ河

一、たけ河と名付事は、さい(雀馬楽)はらゆへなり、竹河と云さひはらは、「たけかはの橋のつめ也、竹河にわれをははなて、めさしくはへて」とうたふ也、されは此さひはらのうちをとりあはせて付合あるへし「めさしくはんとは、まへは

しめの心也」春夏秋冬このさひはらは、うたはる、也、正月のす(系行)□にたまかつらの御かたへ、かほる中将おはしたり、ひけくろにはをくれて、玉かつらはむかしのはなやかさもしめりて、わか御はらのおのこ、三人、姫君二人の御あつかひのみにてすくし給ふ、よき御むすめともなれば、心あるおとは皆けしきはみたたまふ、夕霧はやおとなにて大殿ときこゆ、かのくもゐのかりの御はらのおとこ君、くらんと少将と申は、此あね姫君を心かけて明暮たちもさらす、のそきありきけり、その少将とかほる中将と明石の御子ともと、あそひをうちとけて、さけなとまいりても竹河をうたひし也、あね君はかたちなたかくて、れひせいゐんへ女御にまいり給へは、心かけし人々むなしくて、その御つほねへ女房の中まではよりきたり、物うらめしけなるを見て女はうたち、中よりよめる、

竹河のそのよのことはおもひはつやしのふはかりのふしはなけれど

かほる中将 なかれてのたのめむなしき竹河に世はうき物とおもひしりにき

かやうの歌もさひはらゆへ也、取合て付へし、

一、花あらしと云事、暮のかけ物ゆへ也、玉かつらの御もとにすぐれたる桜有、是を(故殿)このはあね姫君はなとの給ひき、又玉かつらはいもうと君の花との給ひしゆへ、心のうちにやすからすして、ひけくろかくれ給へは此花も(老い木)おい木になりぬるをあはれかりて、この花をかけ物にして姫君御ふたり暮をうち給ひし事有、「桜をかけ物」といふことあらは、「玉かつら」「ひけくろ」などもよし、「やよひのすゑ」「はなあらしゆへ」よし、あね君、左にてまけ給ふ、中君、右にてかち給ひしに、風すこし吹たり、夕霧このちるを見給ひて、まけかたのあね君し(装束)やうそく桜の衣なり、

桜ゆへ風に心のさはくかなおもひくまなき花と見るく

「おもひくま」は思ひなき也、左の御かたと申たる女、

さくと見てかつはちりぬる花なればまくるはふかきうらみとも見す

ときこえたり、かちかたの(勝ち方)いもうと君、山吹の衣也、

風にちる事はよのつねえたなからうつろふ花をた、にしも見し

かち方の女房、花をひろいてよめる、かきつめて見る、

心ありていけの汀におつる花あはとなりてもわかかたによれ

以上、是迄、四十てう

「宇治十てうの分」

一、橋姫

宇治の橋姫といひし事は、源氏よりも(以前)いせん(後)の事也、源氏の御おとうとに八のみやと申せしは、世もたつきなくすかなる御すまひなりしか、きたのかた、姫君二人「あけまきのおほい君、昔にかよふ中の君」これらをうみをきうせ給ひしかは、ち、宮一人してはく、み給ふ程に、御さまをはかへたまはて、心はかりはひしりの道にかよひ、たうとくおはせしゆへ、世の人うは(後)そく(後)のみやとも又そく(俗)ひしりとも申けり、姫君おとなになり給へは、ち、みや(経)きやうをかたてにもちて、かつよみつ、あね君に(琵琶)ひわ、いもうと君に(箏)しやうの琴をしへ給ふ、しやうか(唱歌)しつ、ち、みや、「うち(ママ)すずて、つかひ(ママ)さりさりにし水とりのかりの此世にたちおくれけん」、かるのこなり、

いかにしてすたちけるぞと思ふにもうき水鳥のちきりをそしる

なくくもはねうちかはす君なくはわれす(う)かりになるへかりける

此きやう(京)の御いへはやけて、宇治といふ所によしある山里にわたりて住給ふ、山かさなれる御すみかに尋まいる人なし、かかる野山のすゑにも北の方おはし(細代)まさは、とおもひいてたまはぬ折なし、あしろのけはひ、み、かしかましき河のわたりにて、しつかなるおもひにかなはぬかたもあれとも、いか、せん、はなもみち水のなかれにも、心をよするたよりによせて、いと、しくなかめ給ふより外のことなし、かほる大将はかしは木(前)ゑ(門)もん(替)のかみの御

かくし(隠し子)なり、と人のかほるに申きかせければ、やすからぬおもひにもえ給ふ事かなしくて、出家の心さしふかけれとも、世にもてなされて、そのねかひかなはねは、此うはそくの御ありさまをあらまほしくおほして、つねにま(法文)いりて、ほうもんなどもよみおこなひ給ひけり、みやのかすかなる御ありさまをもたえず(絶えず)とふらい給ふ事、二とせはかりになりたる秋の末に、京をあり明の月にいてたちて、御むまにて宇治のうはそくの宮へ、かほるおはします道の程、あらましきしけき木の中をわけつゝ、山かつの柴のまかきをわけ給ふに、そこはかとなき水のなかれをふみしたく駒のあし音をも忍ひ(く)におはするに、木の葉の露のひや、かにおつれば、

山おろしにたえぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわかなみたかな

おはしつきて、とのゐ人にひけ(殿がち)かなるおとこ、よひいて、とひ給へは、「うはそくはむかひの寺に七日のねんふつにこもりたまへり」と申、そのまに姫君たちの琵琶、琴し給ふひ、き、河浪にもてはやされておもしろければ、このとのい人をかほるかたらひて、すひ(逢垣)かいのおれたるひまより姫君達をかひま見給ふ「すひかひは竹のすきかき也」、あり明の月にすたれあけて、ひとりにははしらかくれたるにあて、ひわをまさくりて月をさしのそきて琵琶(殿)はちをあけて、「あふきならて、これしても月はまねきつへかりけり」との給ふかほ、いとけたかくうつくし「あけまさおほい君也」、いまひとりは琴のうへにかたふきて、「いり日かへす「れ(殿王)うわうの事」はちこそ有けれ、あやしうさまかへておもひをよひたまふ物かな」といふ「中君也」、「およはすとも、これも月にはなる、物(か)かい」ともとす(元末カ)をとりていひかはし給へるさまは、よそにておもひしには(限ず)は、ゆゑく敷うつくしければ、御心うつりはて、かほるより、

橋姫の心をくみてたかせさすさほのしづくに袖そぬれぬる

此時、橋姫とよみ給へるは、宇治に姫君たちすみ給へはよせ事也、是故まきをは名付たり、宇治(橋)はしの物ふりて見ゆるに、あやしき舟に柴かりつみて、かなたこなたへ行ちかひ、はかなき水のうへにかひたるを見給ふに、姫君

たちのあさ夕、詠給ふらん心の中いとおしくて、よみ給へり、「御返し大い君」

さしかへる宇治の河をさあさ夕のしづくや袖をくたしはつらむ

一、宇治に「とはすかたりの古人」といふ事あり、おい人ともいへり、ふるふみかひくさきしみと云は、むし(虫)のみなりてく(首)ひにかけてもつ、みな此古物かたりの付合也、かほるの「御ち、かしは木のゑもんのかみの事をくわしくしらせたまへ」と神仏にもいのり給ひしるしにや、かの御めのとよりける女はう、此宇治のみやにゐて、かしは木のかくれさまに女三の御かたよりの文ともをうしなふへきひまもなく、又女三のかたへつたへまいるとて、

「そなたにてうしなひ給へ」とて、女三の御さまかへ給へる事をゑもんのかみ、
目のまへに此世をそむく君よりもよそにわかる、玉そかなしき

又このわか君「かほる也」生給へる事を、

命あらはそれとも見まし人しれす岩ねにとめし松の生すゑ

是をとし久しくもちめぐりたれども、こし(小侍従)、うはかなくなりしかは、つたへんかたなくて女三へまいらせすして、

かほるにまいらせたり、かほる是を見給ふに、た、いまかきたらんにもおとらねは、かゝる事のためしあらむやとあさましく、かなしかりけり、

二、しひかもと

一、しいかもと、いふは、すこしあひし(哀傷)やうの心也、そうして(総じて)いわひ(祝い)にしい(権)のつけあひ有(付合)へからす、

(同志社大学教授)